

仁賢天皇、  
にんけんてんわう

諱は大脚、  
いみな おはし

字は島郎、  
あぎな しまのわくご

初め億計王と稱し、  
はじ おけのみこ しょう

顕宗帝の母兄なり。  
けんそうてい ぼけい

初め難を丹波・  
はじ なん たには

播磨の間に避く。  
はりま あひだ さ

語は顕宗紀にあり。  
ご けんそうき

清寧帝の二年、  
せいねいてい

召されて京師に至り、  
め けいし いた

明年、  
めいねん

立ちて皇太子となる。  
た くわうたいし

清寧帝崩じ、  
せいねいていほう

天皇、天下を以て  
てんわう てんか もつ

顕宗帝に譲り、  
けんそうてい ゆづ

仍皇太子たり。  
なほくわうたいし

三年四月、顕宗帝崩ず。  
けんそうていほう

是の歳、

紀大磐宿禰、

自ら三韓に王たらんと欲し、

帶山城を任那に築きて之に據る。

適百濟の來り攻むるに會ひ、

兵敗れて還る。

元年戊辰、

春正月五日乙酉、

天皇、

位に石上廣高宮に即く。

是を億計天皇となす。

大臣平群宿禰眞鳥・

大連大伴連室屋、

故の如し。

二月二日壬子、妃、

春日大娘を立てて、

皇后となす。

冬十月三日己酉、つちのととり

顕宗天皇を葬る。けんそうてんわう ほうむ

二年己巳、秋九月、つちのとみ あき

難波小野皇后崩ず。なにはのをぬのくわうごうほう

三年庚午、春二月己巳の朔、かのえうま はる つちのとみ ついたち

石上部舎人を置く。いそのかみべのとねり お

四年辛未、夏五月、かのとひつじ なつ

的臣蚊島・穗瓮君、罪あり、いくばのおみかしま ほべのきみ つみ

皆獄に下されて死す。みなごく くだ

五年壬申、みづのえさる

春二月五日辛卯、諸國に勅して、はる かのとう しよこく ちよく

偏く佐伯部の流亡者を求め、あまね さへきべ りうぼうしや もと

佐伯部仲子が後を以て佐伯造となす。さへきべのなかこ のち もつ さへきのみやつこ

六年癸酉、みづのととり

秋九月四日壬子、あき みづのえね

難波吉士日鷹を高麗に遣はして、なにはのきし ひだか こま つか

工人を求めしむ。こうじん もと

日鷹、

工匠須流枳・奴流枳等を以て還る。

七年甲戌、春正月三日己酉、

小泊瀬稚鷦鷯尊を立てて

皇太子となす。

八年乙亥、大に年あり。

十一年戊寅、秋八月八日丁巳、

天皇、正寝に崩ず。

河内の埴生阪本陵に葬る。

初め顕宗帝の、位に即くとき、

天皇に謂て曰く、先王罪なきに、

大泊瀬天皇、之を殺し、

骨を郊野に棄て、

今に至るまで未だ獲ず、

憤歎、懐に盈ち、

臥して泣き行きて號き、

讎恥を雪がんことを志す。

吾聞く、父の讎には、

興に天を戴かずと。

夫の匹夫も、父母の讎ある者は、

諸に市朝に遇へば、

兵を反さずして

鬪ふといへり。

況や、吾は、

既に天子たり。

今其の陵を發き、

其の骨を砕きて、

以て之に報いんと欲す、

亦可ならずやと。

天皇、泣きて諫めて曰く、

大泊瀬天皇は、

躬ら萬機を

綜べ、

天下に照臨せり。

先王は、

皇胤たりと雖も、

迺に遭遇して、天位に

登らざりき。

此を以て之を

觀れば、

尊卑の分定めり、

而るに陵墓を壞ることを忍ばば、

何を以てか天の

靈を奉ぜん。

其の不可なること

一なり。陛下、

億計と共に、

白髮天皇の殊恩を蒙り、

以て此に至りぬ。

大泊瀬天皇は、

其の父に非ずや。

億計おけき聞く、

言酬ことむくいられざる

ことなく、

徳報とくむくいられざる

ことなしと。

陛下へいか、

國くにを饗うけ、

徳行とくかう廣ひろく聞きえたり。

而しかるに

此これを以もつて

華裔くわえいに見しめさば、

恐おそらくは、

國くにに莅のぞみ

民たみを子ことするの道みちに

あらざらん。

其その不可ふかなること

二なりと。

顯宗帝、

嘉よみして焉これに従したがへり。

天皇、

幼えうにして聡敏そうびん、

仁惠謙恕じんけいけんじよにして、

在位ざいゐの間あひだ、

吏り、其その官くわんに稱かなひ、

民たみ、其その業げふに安やすんじ、

五穀豊ごこくゆたかに登みのり、

戸口蕃殖ここうはんしよくし、

遠近清平ゑんきんせいへいにして、

海内かいだい、仁じんに歸きせり。

追諡つゐしして

仁賢天皇にんけんてんわうと曰いふ。